

学内の国際的人資源を活用したグローバル授業の実践と 国際教養科目の開発研究の成果と課題

稲葉 みどり
(愛知教育大学日本語教育講座)

The Project for Promotion of Multicultural Literacy of University Students by Giving
GLOBAL LECTURES by International Human Resources Available on Campus

(Midori INABA)

(Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of
Education)

要約 本研究は、学内の国際的人資源と考えられる教員研修留学生、特別聴講学生等を活用し、「グローバル授業」と呼ぶ各国・地域の文化、社会、教育等の紹介のプレゼンテーションを実施し、学生（全学教職員を含む）等の多文化リテラシーの向上をめざすものである。グローバル授業は、米国、韓国、ミャンマー、イエメン、ケニア、ラオス等の出身学生の協力を得て、2013年度に12回開催した。そして、大学院、教職員を含む様々な専攻領域から総計約300名が参加した。授業への感想では、海外の国・地域について多くの知識を得られたこと、直接話を聞くという意味で異文化体験できたこと、多文化・他文化を知ることによって自文化を再認識する機会になったこと、海外への興味や関心が高まったこと等を示唆する記述が多く見られた。授業内容は、本学のリベラル・アーツ型教育の多文化リテラシー領域の教育目標とも関わりが深く、今後の整備充実が課題である。

Keywords: グローバル人材育成、グローバル授業、多文化リテラシー、教養教育、異文化体験

1. はじめに

本稿は、2013年度大学教育研究重点配分経費の補助金を受けて実施したプロジェクト「学内の国際的人資源を活用したグローバル授業の実践と国際教養科目の開発研究」（研究代表者・稲葉みどり）の実施の目的、実施の概要、成果、課題等をまとめたものである。本プロジェクトでは、グローバル人材を育成する方策の1つとして、大学に在籍する留学生、教員研修留学生等を人的資源として活用して行う授業や活動の方法を研究する。プロジェクトの柱は「グローバル授業」と呼ぶ留学生による各国の文化、社会、教育等の紹介のプレゼンテーションである。これを全学向けに開催し、学生、教職員の異文化理解や国際的視野を広め、国際教養を高めることを目的とする。授業では使用言語に限定を設けず、コミュニケーションのために様々な言語を利用する。英語で行う場合もあり、日本語で行う場合もある。参加者や授業目的（例えば、英語教育教員研修会では主に英語でプレゼンテーションをする

等)によって使い分ける。2013年度は英語の堪能な留学生等が多く、いずれも可能である。また、グローバル授業では、日本人の学生にも発表の機会を与える。発表者と参加者がテーマについて質疑応答や意見交換を行う国際合同授業でもある。2013年度は試行的に実施し、実践から得られた知見を構築し、大学教育におけるグローバル人材育成、多文化リテラシーの育成のためのプログラム開発の基礎づくりをめざしている。

2. プロジェクトの背景と位置づけ

グローバル人材育成戦略（内閣官房, 2012）によると日本人の海外留学は2004年をピークに減少し、海外での勤務を希望しない新入社員が増加する等の若者の内向き志向が顕著している。日本の新たな経済成長にはイノベティブな若者の育成が急務で、大学教育においてはグローバル人材の育成が急務である。それには、グローバル人材育成のための体系的な教育プログラム、及び、シラバスを開発し、大学教育の中に組み込む必要があると考えられる。グローバル人材育成戦略では、豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ、国際的に活躍できる「グローバル人材」を我が国で継続的に育てる必要性を指摘している。本プロジェクトにおけるグローバル人材育成に向けての取り組みや構想は、当該戦略の「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する」能力、及び、「外国語によるコミュニケーション能力」等の促進に関わる企画と考えている。

3. リベラル・アーツ型教育との関わり

愛知教育大学では、2011年度から4ヵ年計画で文部科学省特別経費プロジェクトである「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」（愛知教育大学, 2012; 2013; 2014）が実施されている。このプロジェクトでは、ジェネリック・スキルをリベラル・アーツ型教育の目標の1つとし、概念を明確化すると共に、育成に効果的な授業方法の調査研究が進められている。ジェネリック・スキルとは、「大学生としての知的活動だけでなく、社会及び職業生活を生き抜くためにも必要とされる汎用的技能」のことを表し、その中では、ジェネリック・スキル（汎用的能力）の4つの要素として、教養科目に「リテラシー」「基本概念」「現代的課題」「感性・創造」の4つの学修領域が設定されている。リテラシー領域は、さらに、「市民リテラシー」「多文化リテラシー」「科学リテラシー」「ものづくりリテラシー」に細分類されている。

本研究で目指すものは、この中の多文化リテラシーの構築に最も関わりが深いと考えられる。愛知教育大学（2014:88）によれば、多文化リテラシー領域では、「グローバル化した世界に存在する様々な文化に関する知識・情報を収集・理解し、他者とのコミュニケーションをとりながら対話により問題処理・解決するための基礎を備えること（理解）」「映像分析、生活様式の体験、聞き取り調査等を通じて自己のものとは異なる文化に実際に接し、文化の差異を理解してコミュニケーションをとるための基礎を修得する（他文化との接触）」「自文化・自国文化を中心とした思考から脱却し、多様な文化の存在を承認し、対等・平等に考え

る姿勢を身に付け、他者との意見交換する力を備えること（文化を相対的に捉える）」を目標としている。本研究のプロジェクトでは、異文化、多文化、他文化に関して、その国・地域の留学生等が直接紹介することで、参加者の文化理解を深めるだけでなく、直接意見交換する機会を提供することができる点が特色と考えられる。グローバル授業は正規科目ではないが、多文化リテラシーの向上をめざした企画である。

4. プロジェクトの実施の概要

プロジェクトの準備は4月より着手し、留学生は国・地域の言語、教育、文化、伝統、宗教、社会等の紹介のプレゼンテーションを制作した。協力学生は米国、韓国、ブラジル、ミャンマー、イエメン、ケニア、モンゴル、ラオス、インドネシア等の出身学生である。そして、7月より全学を対象として「グローバル授業」を開始した。表は「平成25年度グローバル授業実施概要」を示している。

【表】平成25年度グローバル授業実施概要

日程	主な内容	発表者	出身国・地域	参加者概数	
第1回	7月5日	アメリカ銃社会	特別聴講生	米 国	30名
第2回	7月13日	フレドニアでの留生活	国際文化4年	日 本	20名
第3回	11月17日	ケニアの生活と文化	教員研修生	ケニア	25名
第4回	11月23日	ミャンマーの宗教と生活	教員研修生	ミャンマー	4名
第5回	11月26日	ミャンマーの教育と文化	教員研修生	ミャンマー	20名
第6回	12月3日	イエメンの首都と社会	教員研修生	イエメン	20名
第7回	12月4日	ミャンマーの民族と学校	教員研修生	ミャンマー	20名
第8回	12月9日	ミャンマーの大学と料理	教員研修生	ミャンマー	10名
第9回	12月10日	韓国の学校と伝統行事	特別聴講生	韓 国	30名
第10回	12月17日	ラオスの文化と社会	教員研修生	ラオス	20名
第11回	12月19日	アメリカのクリスマス	特別聴講生	米 国	30名
第12回 総括	12月21日 小中高英語 教員研修会	各国の文化紹介と英語教育事情	教員研修生 6名 特別聴講生 2名	米国・韓国・ ケニア・ラオ ス・ミャンマ ー・イエメン	80名

第1回は、米国からの留学生による「アメリカ銃社会」に関するプレゼンテーションを行った。授業内容はAUE News 65号（稲葉, 2013f）に掲載されている。第2回は米国学術交流協定校のニューヨーク州立大学フレドニア校留学経験者の日本人学生（国際文化コース4年）が担当した。内容は「アメリカの大学での留学体験」である。

後期は各国の教育制度、教育環境、教育問題、英語教育事情等のテーマを絞った授業を企画した。第1回はケニアからの教員研修留学生による生活、民族、文化等に関する紹介である。授業内容はAUE News 73号(稲葉, 2013g)で紹介している。第2回はミャンマーの教員研修留学生による教育の現状等に関する授業である。その後、米国、韓国、ミャンマー、イエメン、ケニア、ラオスの文化、社会、教育等の授業を実施した。授業内容はAUE News 75号(稲葉, 2014a)に掲載されている。また、11月には大学院共同博士課程の学生を対象とした出前授業をした。以下の図1~6はグローバル授業の様子である。

【図1】 第6回グローバル授業：イエメンの料理の紹介



【図2】 第9回グローバル授業：韓国の民族衣装の説明



【図3】 第10回グローバル授業：ラオスの大学の教師の服装



【図4】 第11回グローバル授業：ボールステート大学の紹介



グローバル授業は、後期からランチタイム（昼食持参可）に開催することにした。参加したいが授業がある等の声が多かったためである。場所は日本語教育第1演習室（第二人文棟1階）で、参加者がアクセスしやすい教室を選んだ。ランチタイム（12:30-13:00）にしたことにより教職員からの参加もあった。そして、総括として12月には小中高英語教育教員研修会（愛知教育大学小中英語支援室主催）で各国の文化紹介と英語教育事情のランチョンセミナー（稲葉, 2013e）を実施した。授業の内容はAUE News75号（稲葉, 2014a）、及び研修会報告書（稲葉, 2014d）で紹介している。

【図5】第12回グローバル授業（小中高英語教育教員研修会）：ミャンマー語の紹介



5. 多文化リテラシーの構築への効果

グローバル授業では、毎回参加者に授業に関するアンケート「感想を書こう」を実施した。アンケートの内容は、新たに知ったこと、興味を持ったこと、もっと知りたいこと、発表者への質問・コメント、授業の感想等の項目に自由に記述する形式である。アンケートは毎回発表者にも渡し、自分の発表を振り返る機会とした。授業は毎回録画し、発表者へのフィードバックにも活用した。ここでは、第3回「ケニアの生活と文化」に関する感想を基にその役割や効果を考察する。

まず新しく知ったことでは、「ケニアの国旗とその意味（赤は血、黒は人、緑は自然、白は平和）（中等理科4年）」が多く見られた。国旗の色に建国の歴史を踏まえた多くの意味が込められていることは参加者には初耳であったようである。あらためて日本の国旗「日の丸」の意味を考える様子も見られ、他文化を知ることで、自分の国を振り返る機会になったと思われる。次に「1つの国にいろいろな種族がいること（初等情報4年）」「40以上の民族があること」という回答が多く見られた。他民族国家には馴染みが薄いのか、「マサイ族について」「民族毎に食べ物がちがうこと」「民族独特の衣服や習慣があること」「各民族の文化について（養護教諭養成2年）」等の回答も見られた。また、「ケニアが大統領制だということ（宇宙物質科学3年）」「ケニアの行政区分、国歌、政治、気象、季節、人口、言葉、民族、家等（事務職員）」「1963年まで英国の植民地であったこと（保健体育4年）」「ケニアの自然（雨期、乾期があること）」、等の社会や自然に関することも記述されていた。さらに、ケニアの言葉については、「公用語は英語、国語はスワヒリ語、民族の言葉が使われていること（国際文化2年）」等が新情報であったようである。

興味を持ったことでは、「食べ物、服装、家」「ケニアのいろいろな名所」「チーターとレ

パードの違い (中等理科 4 年)」、これらは「模様で見分けること (初等理科 4 年)」「山羊の血を飲んでたこと (国際文化 2 年)」等が見られた。また、「日本語とスワヒリ語の違い」「スワヒリ語が日本人にとって読みやすいということに驚いた／スワヒリ語を勉強してみようかと思った (宇宙物質科学 3 年)」等、これまで学んだことのない言語に関心を持ったことがうかがえる。その他、「ケニアの国歌を聞いてよかった／どこかで聞いたことのあるような歌だった (中等理科 4 年)」「民族やマサイ族に関する紹介がおもしろかった」等の感想も見られた。

発表者に対する質問やもっと知りたいことでは、「毎日どのような生活をしているのか (教職大学院 2 年)」「各民族の生活習慣をもっと知りたい」「ケニアの結婚事情 (宇宙物質科学 3 年)」「ケニアの自然」「衣食住」等の一般的な質問、「学校のシステム (中等美術 4 年)」「小学校 8 年は義務教育か」等の教育に関する質問、「ケニアに日本人はどのぐらいいるか」「日本についてはどのぐらい知られているか」「ケニアの子どもは何をして遊んでいるか」「ケニアのスポーツ選手が強いわけ」等の特定の質問もあった。また、ケニアはアメリカのオバマ大統領の家族の出身国でもあることから、今でもケニアに住む「オバマの家族のこと (初等社会)」を知りたいという回答も見られた。ケニアだけでなく、「他のアフリカの国々について知りたい」等も見られ、関心がケニア以外にも広がったことがわかる。

【図 6】 第 3 回グローバル授業：スワヒリ語と日本語の関係



全体の感想としては、「ケニアの伝統的な文化や特徴的なことがわかってよかった」「今まで全然知らなかったことを知ってとても楽しかった」「普段なじみのないアフリカの国について知る機会となった」「ケニアのいろいろなことがわかってよかった」等、異文化について

て知ることができたという回答、「ケニアのことはほとんど知らなかったけれど、ケニアの民族や暮らしについてもっと知りたくなった」等の興味や関心を高揚させたことをうかがわせる記述、また、「ケニアのコーヒーやお茶を飲んでみたいと思った（日本語教育3年）」という実体験をさらに求める様子、「ケニアに是非行ってみたいと思った（国際文化3年）」等の外向きの姿勢をうかがわせる回答等も多く見られた。「もっといろいろなことを聞いてみたかった（初等理科4年）」「たくさんのスライドがあったので、もっといろいろ見たかった」「もっと長い時間聞きたかった」等の感想も多く、グローバル授業で異文化について知ることの楽しさを体験したと思われる。また、グローバル・ディスカッションもしてみたい（初等理科4年）」という積極的な姿勢を示した参加者もいた。

6. 成果

以上のアンケートの記述から、参加者が海外の国・地域の文化や社会について多くのことを学んだことが示唆された。また、留学生から得たグローバル授業の感想からは、日本語を多く学んだこと、授業や準備を含めて日本人との交流が深まったこと、そして、自分の国・地域のことを紹介するのはとても楽しかったことが報告された。よって、グローバル授業は、幾分ではあるが参加者の多文化リテラシーの向上に役割を果たしたのではないかと考えられる。また、他文化・多文化を知ること、自文化を再認識する場面も見られた。

外国へ行ってみたい、食べてみたい等、参加者の外向きの姿勢にも刺激を与えたのではないかと考えられる。さらに、特にこのプロジェクトは、DVD等のメディアを利用して海外の文化を学ぶのではなく、その国・地域出身の人から直接話を聞くという機会を提供するものである。質疑応答等、発表者との交流も含まれており、異文化を身近なところで直接体験する機会を提供できたと考えている。

7. 今後の方向性と課題

今年度は試行的にグローバル授業を実施した。今後は授業で実施したアンケートの内容や留学生から得た授業に関する感想等をさらに詳しく分析し、実践から得られた知見を集約し、学生等の多文化リテラシーの向上、グローバル人材の育成に関する研究を進めたいと考えている。筆者はこれまでグローバル・リテラシーの向上やキャンパスの国際化に関して様々な取り組みをしてきた。海外学術協定校からの招聘研究者を活用した連携授業（稲葉, 2012; 2013a）、外国語コミュニケーション能力の向上を促進するためにイマージョン・ルーム活動の実施（稲葉, 2010; 2011; 2013c）、グローバル人材育成のための基礎研究（稲葉, 2008; 2013b; 2013d; 2014b; 2014c）等は、本研究の構想の背景となっている。本研究とこれらの研究を合わせて行い、高等教育機関におけるグローバル教育の高度化のためのプログラム開発をすることが今後の方向性と課題である。

謝 辞

本研究を進めるにあたっては、2013年度大学教育研究重点配分経費の補助金の助成を受けました。松田正久学長、及び、事務の関係者の方々に感謝の意を表します。また、グローバル授業のために一生懸命準備をしてくださった留学生の方々にも感謝の気持ちでいっぱいです。広報秘書課の小林則子氏、眞野遠慧氏には、グローバル授業の取材に何度も足をお運びいただき、大学ニュース（AUE News）に掲載していただくことができました。これにより海外からも直接アクセスして記事を読覧でき、留学生の本学での活動の様子や学習成果等を海外に発信できました。そして、小中高英語教員研修会でランチョンセミナー実施、及び、その報告書の出版の機会を設けて下さった外国語教育講座高橋美由紀氏、及び、小中英語支援室のスタッフ皆様にもこの場を借りて御礼申し上げます。グローバル授業を行うことができたのは、この他にも多くの方々の支えがあったからだと思います。ご支援ありがとうございました。

参考文献・資料

- 愛知教育大学（2012）「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開・2011年度プロジェクト活動報告書（文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実）」愛知教育大学教育創造開発機構大学教育研究センターリベラル・アーツ教育部門
- 愛知教育大学（2013）「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開・2012年度プロジェクト活動報告書（文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実）」愛知教育大学教育創造開発機構大学教育研究センターリベラル・アーツ教育部門
- 愛知教育大学（2014）「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開・2013年度プロジェクト活動報告書（文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実）」愛知教育大学教育創造開発機構大学教育研究センターリベラル・アーツ教育部門
- 稲葉みどり（2008）.「国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上—アンケート調査による効果の分析」『教育実践総合センター紀要』11, 33-40.
- 稲葉みどり（2010）.「英語イメージョン・ルームの開設—プロジェクト—の役割と今後の可能性」『教育実践総合センター紀要』13, 37-44.
- 稲葉みどり（2011）.「英語イメージョン・ルームの活動—自律的な異文化交流の推進」ウェブマガジン『留学交流』8.
- 稲葉みどり（2012）.「愛知教育大学におけるグローバル人材の育成の取り組み—タイからの招聘研究者を人的資源として」『教育創造開発機構紀要』2, 19-27.
- 稲葉みどり（2013a）.「インドネシアからの招聘研究者との連携による異文化理解の授業実践—グローバル人材の育成に向けて—」『教育創造開発機構紀要』3, 53-61.

- 稲葉みどり (2013b). 「グローバル人材の育成に向けた授業と活動の構想－愛知教育大学での実践を基に」『第3回 教科開発学研究会発表論文集』, 46－51.
- 稲葉みどり (2013c). 「英語イマージョン・ルーム活動－コミュニケーション能力向上への自律的な取り組み－」大学英語教育学会第52回 (2013年度) 国際大会特別企画グローバル・ポスターセッション報告書『グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み』CD版, 42-44.
- 稲葉みどり (2013d). 「グローバル人材の基礎づくり－学校教育の中で培う資質とは」『小中高英語教育教員研修会 (2013年12月)・ワークショップ資料』, 13－18.
- 稲葉みどり (2013e). 「各国の文化紹介と英語教育自事情－愛知教育大学教員研修留学生によるプレゼンテーション」『小中高英語教育教員研修会 (2013年12月)・ランチョンセミナー資料』, 33－34.
- 稲葉みどり (2013f). 「グローバル授業 (報告)」『AUE News』 第65号 (2013年7月15日), 3.
- 稲葉みどり (2013g). 「グローバル授業－ケニアの生活と文化 (報告)」『AUE News』 第73号 (2013年12月1日), 3-4.
- 稲葉みどり (2014a). 「グローバル授業とランチョンセミナー (報告)」『AUE News』 第75号 (2014年1月15日), 7-8.
- 稲葉みどり (2014b). 「グローバル人材の資質・能力に関する大学生の意識」『第4回教科開発学研究会発表論文集』, 13-16.
- 稲葉みどり (2014c). 「グローバル人材の資質・能力について考える－英語教員をめざす学生の意識」『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』, 49－59.
- 稲葉みどり (2014d). 「多文化リテラシーの構築をめざして－各国の文化紹介と英語教育事情のランチョンセミナー」『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』, 105－118.
- 内閣官房 (2012). 「グローバル人材育成戦略」(グローバル人材育成推進会議審議まとめ) (2012年6月4日).